

## 「気」の言語観

藤 原 暹

はじめに、

「気」(ke, ki)という表現に日本人特有の心理、感覚、判断基準が在り、それは広く文化様式にも顕現するという。(桜林仁・気合的芸術、土居健郎・気ままな甘え、木村敏・人と人との気のアイデンティティ、赤塚行雄・気の構造 etc)

こうした指摘の多くは、分析に「気」の使用例の考察を手続として用いる。「気」というロゴス面からのアプローチである。この方法は早く中井正一・「日本語としての気(け・き)の変遷<sup>\*</sup>」で開花した。彼は日本人が「気」(き)という表現を自覚的に用い自己意識を提示したのは140~170であり、それは武士から町人へ語彙が移行した結果定着し今日に至ったという。

しかし、古代から今日まで、各時代各様に「気」は観方の異りはあったが不変的にも存在し続けた。こうした気をkiと表現する。つまり各時代各様のkiの観方は何か、その観方におけるロゴス化された「気」とkiは如何なる関係にあるかが一つの留意点であり課題となる。

I、中井氏は140『太平記』頃「気」の自覚過程で「機」と対応したという。(赤塚氏も同様)これは何を意味するであろうか。周知の如く、「機」とは仏教教理において、衆生が気持として仏を感じる「きざし」=「微」を指す。仏理よりkiを観て、把握した時に「機」と表現したのである。しかし、「機」が「気」と対応してきたのは、従来の「機」で表現し得ない状況が自覚され、そうした理念以前のものをロゴス化する過程で「気」と表現したのである。すでに「気」と表現されるにはkiの「気」化が行なわれている。この「気」の代表者楠木正成は「血<sup>\*\*</sup>気の勇者」でなく「仁義の勇者」である。『太平記』ではkiが仏理から儒理によって捉えられる状況を示している。応仁の乱から戦国にかけて武将の行動は儒教的倫理化の過程で合理化され深められる。

II、徳川氏の元和偃武以来平和時となる。この時期に「機」はほとんど消滅すると共に、「気」の多用を見る。就中『可笑記』は豊富な用例を示している。ここには『太平記』的「気」の「うかぬ」様態や表現し得ないkiが<sup>\*</sup>気と表現されてくる。こうした新たに「気」と対応する<sup>\*</sup>気が西鶴作品から近松へと展開する。170における「気」の問題は単に語彙が武士社会から町人社会に移行したことよりも、「気」と<sup>\*</sup>気の対応形式である。

おわりに、

17cに使用された気の用語例が今日迄用いられている。このことは「気」と<sup>キ</sup>気との対応関係が継続している事を物語る。従って以後においては、「気」と<sup>キ</sup>気が対決、断絶してある危機状況を生じるか又は相互に連鎖、融合して安定状況を生じるかのいずれかであったものと推定される。(別稿参照)

\*\*\*

いずれにしても本発表は気の把握方法(観方)における若干の問題点の提示と論証資料の紹介(この点は発表当日明示した)を行うことにあった。

なお、本発表後、日本思想史学会(於東北大学)において、生活としての思想把握の側面から拡充発表したことを附記する。

注※ 「帝国学士院紀要 第五巻一号」

※※ 『法華玄義』には機を徴とすると共に『易経繫辞』の気を同一視する。

「機」と「気」との関連、融合形式は存在していた。一方、<sup>ki</sup>kiはそうした整序化された(理念化された)ものとは別に成り立ってきたし、明きらかに、ロゴス化された文字に表現し得ないものという規定も歴史上発見しうる。

\*\*\* 「清心女子大学国文科紀要 第八号」